



復活節第6主日 (ヨハネ 14:15-21)

あなたがたをみなしごにはしておかない

復活節第6主日、予定では来週「主の昇天」から田平教会聖堂でのミサが再開されます。新しい生活の工夫をしながら日常生活を取り戻し、その中に宗教活動であるミサの再開も含まれます。中田神父からは、これまでミサを中止していた期間の意味づけをもう一度示して、ミサの再開までに見えない心の部分での準備を整える手助けをしたいと思います。

心の準備をするために、与えられた福音朗読の中ですぐに目に留まるのは、14章18節「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」この箇所をよく理解することが鍵になるでしょう。この箇所が納得できれば、私たちが自宅で辛抱してミサ再開を待ち、自宅で何とかして日曜日の恵みを探し続け、不安の中で過ごしたことに意味を見いだせるはずです。

単純なたとえから入りたいと思います。土を掘り起こしたとしましょう。配水管を埋めるとか、建物の基礎を地面に置くためとか、何かしらの理由で土を掘り起こしました。すると見た目にはそれまであった土はなくなって、大きな空洞が生じます。しかしながら当然、掘り起こした土はどこかに存在するわけです。消えて無くなったりはしません。

掘り起こされた土は、必要な所で、また新しい目的のために用いられます。場合によっては保管されて、必要になったときに使われます。なかには悪意のある人が掘り起こした土は、不法に捨てられ、放置されるかも知れません。いずれにせよ、掘り起こされた土は掘ったその場所からはなくなっても、どこかにあるのがふつうです。

さて、このたとえを私たちが中止していたミサに当てはめてみましょう。田平教会の聖堂に集まって、それぞれの意向で与り、ミサの中で献金をお献げして、恵みも頂いて帰りました。ミサの中での恵みはすべて、司祭の手を通して、司祭を道具として、イエス・キリストが配ってくださった恵みです。3月29日の公式ミサ以降、およそ50日間、教会の典礼にたとえればご復活後40日のご昇天のその先、50日目の聖霊降臨くらの期間、ミサの恵みを奪われてしまいました。

田平教会の神の民は、ミサが取り上げられ、「みなしご」になったのでしょうか？決してそうではありません。取り去られた恵みは消えてしまうのでは無く、どこかですでに配られている。少なくとも恵みの出番を待ってどこかに保管され、出番が来たらいつでも配られる。きっとそうに違いないと私は考えています。

ではどこに、取り去られた恵み、奪われた期間の恵みは運ばれているのでしょうか。教区内すべての教会聖堂で配られていたはずの日曜日ごとの恵みは、地面から掘り起こされた土のように、どこかで活用されたのでしょうか。

明らかに、ここに運ばれたという場所を一つ紹介します。それは大司教館です。大司教館には高見大司教様、中村補佐司教様、秘書の神父様、他にも引退の司教様がおられますが、すでにご存知の通り、大司教館で聖木曜日から今週復活節第6主日まで、大司教様か補佐司教様の司式でミサの中継が行われてきました。司教様方が勇気を出して、利用で

きる手段を躊躇せず使ってくださいったことで、一つのミサで最大 2900 回も、司教様のミサに参加したのです。

これは内緒の話ですが、司教様司式のミサが浦上教会で行われても、2千人を超える信徒・修道者・司祭が集まることはまずありません。直接のミサで、恵みははるかに多いはずですが、浦上教会を満杯にするなど、聞いたことがありません（あくまでも小声で話しています。大司教様の耳に入ったらえらいことです）。

その点を踏まえると、最大 2900 回、ミサの動画が利用されたというのは驚くべきことでしょう。大司教様が司式する堅信式のミサや、教区主催の各地のミサは完全に奪われてしまいましたが、その恵みは消えて無くなったのではなく、大司教館の、参列者が誰もいない小さなチャペルで、より多くの人を惹きつけていたのです。

長崎教区だけではありません。大阪教区、東京教区も同じような取り組みをしました。調べてはおりませんが、ほかにも世界中多くの国で、いろんな特色あるライブ中継ミサが行われたことでしょう。現代でなければ、このような取り組みは不可能でしたし、司教様方やお付きの方々、教区本部事務局の方々の尽力があって実現しました。教区内のすべての小教区聖堂で受ける恵みは奪われていましたが、その恵みがそっくり大司教館に運ばれて、教区全体のために配られていたのです。

今週の朗読でイエスは「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」と弟子たちに約束なさいました。もしかしたら、大司教様、補佐司教様が決断しなかったら、長崎教区民は「みなしご」の状態になっていたかも知れません。けれどもイエスはそのような状態を決してお許しにならず、いろんな人を動かして、「復活していつも共にいるイエス」を示してくださいったのです。

長崎教区、日本の教会だけではありません。「全世界の教会で、恵みは奪われてしまったように見えたかも知れないけれど、決して無駄に終わったのではないよ」と、証明しててくださいったのです。説教の中では一つだけしか例を挙げることができませんでした。ほかにも「イエスが私たちをみなしごにはしない」その証を見ることができます。

教会学校でも、実際の教会学校であれば一度参加した内容を繰り返してもらうことは不可能でした。けれどもこの機会に、「オンライン教会学校」を開いたカテキスタたちもいるでしょう。動画が保存、あるいはダウンロードされれば、繰り返し学び直すことも可能です。今までは不可能だった恵みの分配のしかたが、「みなしご」になったように思えたこの期間に実現したのです。

復活して、いつも共にいてくださるイエスの計り知れない力と恵みを、あらためて知ったミサ中止の期間でした。運び去られたかのように思われたもの、恵みも社会生活のさまざまなものも、三位一体の神の深い計らいによって、必ず巡り会うのです。イエスは決して、私たちを「みなしご」にはしないのです。